フィリピンの思いで

佐々木正明

あれは・・・・・１９７４年の３月か、４月のことだったと思います。私たちがフィリピンに渡って、まだ１年も経っていないころの出来ごとです。当時、私は家族を連れて、フィリピンの神学校に留学をしていました。東南アジアのどこかで、宣教師になりたいと思っていたため、一大決心をして海外生活をしていたのです。当時はまだ、アメリカやイギリス、あるいはヨーロッパの国に留学する人は、それなりにいたのですが、東南アジアに留学する人など、非常に稀だったのです。私たちは、日本にいては東南アジアについて学ぶ事は、とても難しいと判断し、多くの人たちの大反対を押し切って、フィリピンに来ていたのです。

私たちは神学校で、色々な国から来ていた、たくさんの人たちに会いました。そのような人達の中で特に親しくなったのは、フィリピンの中部、セブ地方から来ていた神学生夫婦でした。私たちは彼らの誘いに乗って、セブ地域の小さな島々の教会を訪れる計画を立てました。それで、３歳の長男と１歳を超えたばかりの長女を連れて・・・・・そうそう、次男はまだ誕生していませんでした・・・・・。セブのマクタン飛行場に降り立ちました。

ちょうど、日曜日の朝一番の飛行機で、私たちは飛行場からまっすぐ、マクタン島にある私たちの教会の一つに向かいました。私たちは飛行場を出ると、ごった返しの人々をかき分け、トライスクルという、フィリピンではごく普通の乗り物を捕まえて、それに乗り込みました。トライスクルというのは、日本からの中古のオートバイに、簡単なサイドカーを付けた乗り物で、近場へ行くときにはとても便利な代物でした。無理をすれば、５人も６人もギューギュー詰めで乗り込むことも可能でした。私たち夫婦は二人の幼子を連れて、すべての荷物も詰め込み、出発しました。教会はこの辺りではよく知られているので、名前さえ告げれば間違いなく、連れて行ってもらえるということでしたので、トライスクルの持ち主に教会の名前を告げたところ、「ああ知っているよ！」ということでしたので、少しも心配しなかったのです。

途中、「あれが、マゼランを殺したマクタンの酋長、ラプラプの像だよ」と、ラプラプの獰猛ぶりを、あたかも見てきたように語るドライバー。私は「良く知っていますエ」と相槌ち、「ここは観光地だから、その位は説明できなければ・・・」と、自慢げな青年ドライ

バーの説明を楽しんだものです。あれやこれやで、ものの１５分も乗ると、結構しっかりと建てられた教会の前に着きました。連絡を受けていた牧師や信徒たちは、大歓迎をしてくれました。でも、もう、礼拝会は始まっていたのです。休む間もなく、私は講壇に引き立てられ、慣れない英語で説教をすることになりました。日本からの牧師が来たということで、教会は満員でした。まだ、日本人などは大変物珍しく、私たちは中国から来たパンダくらいの、見世物になっていたのだと思います。

　説教を始めて、１０分くらいたった時、突然、礼拝会が騒がしくなりました。牧師と信徒の代表たちが、あっちこっちと動き回り、何か大変なことが起こった様子です。しかもその騒ぎの真ん中に、私の妻が、とても困惑した様子で立ちすくんでいました。突然、牧師が大声で叫びました。「皆さん。緊急事態です。今すぐみんなでお祈りしてください！」何事かと、私は説教を中断して、牧師の次の言葉を待ちました。「佐々木先生の奥様が、財布とパスポートと、トラベル・ドキュメント一切と、大切なものすべてが入っているハンドバックを、失くしてしまいました。多分、先ほど先生が乗ってこられた、トライスクルに忘れてしまったのだと思います。皆さん、なくなったハンドバックが無事戻って来るように、いま祈ってください！」私は驚嘆してしまいました。「あれがなくなってしまうと、私たちは、明日からではなく、今日のいまから、何もできなくなる・・・・。」宣教師訓練生である私は、努めて平静をよそおい、皆と一緒に２，３分祈りました。そして説教を続けたのです。

　当時のフィリピンは、悪く言うと、泥棒の天国のような国でした。たとえば、街に出かけると、銀行はもちろんのこと、大きなお店やレストランには、必ずショットガンを持ったガードが、二人ほど警護をしていました。小さなお店は、客が中に入ることが出来ないようになっていました。窓口に立って、あれこれと必要なものを注文するのです。しかもその窓口には、必ず、鉄格子がはめられていたものです。品物が盗まれることがないようにです。病院では窓という窓に、鉄格子かアルミの格子がはめられていました。入院患者が支払いをしないまま、逃げ出すことがないように、警戒に怠りなかったのです。

　あれから５０年以上過ぎたいま、私は日本に帰国して、８０歳を超えた末期の癌患者ですが、今年の１月に、２週間のフィリピン旅行をしてきました。今のフィリピンの発展は、まさに、驚くばかりで・・・・街々はすっかり美しくなり、人々はとても豊かになったと感心しましたが、ひとびとの道徳心は、まだ追いついていないようで、ひそかに懐かしさを感じたものです。

　さて私の説教は、一時中断されましたが、何事にも動じない、クリスチャンの模範を見せるべく、私は平常をよそおって説教を続けていたのですが、またも、礼拝会場は騒々し

くなりました。牧師が入口付近で、ピョンピョンと飛び跳ねています。妻が、ペコペコと頭を下げ、日本流にお礼をしたり、謝ったりしているのも目に入りました。私はすぐに気付きました。バッグが戻って来たんだな！？」牧師がまた大声で叫びました。「佐々木先生の奥様のバッグが戻ってきました。トライスクルの運転手が気付いて、届けてくれたんです。皆さん。これは奇跡です。このマクタン島には、どれだけたくさんのトライスクルがあるかは知りませんが、こんな話は聞いたことがありません。皆さんのお祈りのおかげです。」私の説教は、感謝の祈りのために、またも中断されてしまいました。

　トライスクルの運転手は、私の妻が差し出すお礼のお金も受け取らす、名前も告げず、颯爽と、黒い煙をもうもうとたなびかせる、トライスクルに乗って去って行ってしまったそうです。みんな驚きました。みんな感動しました。「神様が祈りに応えて下さった！」　でも私は、フィリピンにもこのような人がいるのだと、心から嬉しくなりました。少し信仰的に言うならば、私たちの祈りを聞き届けて下さった神様の囁きを、しっかりと受け止めてくれたフィリピン人がいるのだと、本当に嬉しくなりました。

　私たちの旅は、とても楽しいものになりました。海岸での、レモングラスを腹に詰めた鶏の丸焼きパーティ、小さなクリ船でたくさんの小島を回り、ふわふわと海面に浮かんでいる、茶色いクラゲを素手ですくい取り、豆腐のように刻んで、しょうがとニンニクと、玉ねぎとを加え、たっぷりと酢を入れてかき混ぜ、小舟のなかで豪快にいただく昼食。仕掛けで捕えたたくさんのカニを茹でて頂く夕飯。トイレがないので、海流のいちばん下の位置にいっての排泄。いろいろな貝殻を拾い集めていると、島の人たちが沢山貝殻を持ってきてくれて・・・・大騒ぎ。

私たちは、あの、トライスクルの運転手のおかげで、フィリピンが好きになったのです。この話をすると、私の子供たちは、「何にも覚えてないよ。でもお母さんらしいね」と笑います。このおおらかな妻がいて、宣教師としてフィリピンで働くことが出来ました。その妻も召されて、早くも５年になろうとしています。